



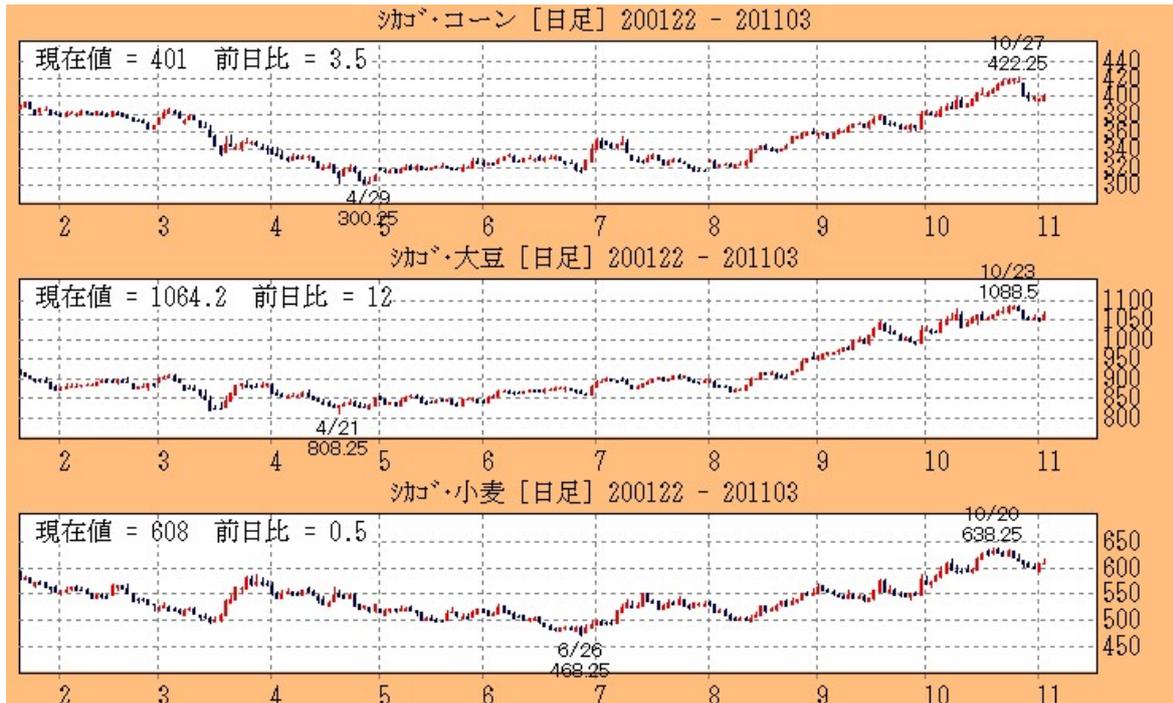
週刊穀物



世界の穀物情報がここに凝縮されています。
毎週水曜日夕方発行

トウモロコシも大豆も反発

2020/11/4



3日のシカゴトウモロコシ12月限は前日比+3.50セント高の401.00セントと反発。取引レンジは395.25セント～403.25セント。前日の取引終了後に米農務省が発表した収穫率が事前予想よりを下回ったことや、ドル安傾向を受けて輸出拡大観測が強まったことで買いが優勢となった。時間外取引で400セントを突破した後は400セントが下値支持線に転じ、取引を終えるまで400セントを割り込んだら買い戻される底堅い動きとなり400セント台を維持したまま引けた。米大統領選の投開票が始まるなか、大口の売買は手控えられた一方で、バイデン氏勝利・上下両院民主奪取との見方が広がったことで、政治的な不透明感が払しょくされるとの思惑からリスクを取る動きになっている。もし、トランプ氏勝利（上院の共和党勝利なら尚更）となればリスク回避の展開も予想される。

3日のシカゴ大豆1月限は前日比+12.00セント高の1064.25セントと急反発。取引レンジは1051.75セント～1070.75セント。大豆の主要輸出国として競合するブラジルが米国産大豆を購入したと伝わったことから買いが優勢となった。また、前日の取引終了後に米農務省が発表した収穫率が事前予想よりを下回ったことも買い材料となった。ドル安傾向を受けて輸出拡大期待が高まったことも買いを支援し、一時1070.75セントの高値をつけた。その後は上げ幅を縮小したが、1060セント台を割り込むことなく取引を終えている。

3日のシカゴ小麦12月限は前日比+0.50セント高の608.00セントと小幅続伸。取引レンジは604.00セント～616.50セント。ドル安傾向を受けて輸出拡大観測が強まったことで買いが優勢となった。前日の取引終了後に米農務省が発表した、米国産冬小麦の作柄状況と収穫の進捗状況が事前予想を下回ったことも買いを支援した。大豆とコーンの堅調な足取りも買いを誘った。ただ、米プレースの降雨予想が、冬小麦の生育に寄与するとの見方が上値を重くした。



Crop Progress

トウモロコシ			18州
Hrvested	前年度	2020年度	過去5年平均
9月13日	3%	5%	5%
9月20日	6%	8%	10%
9月27日	10%	15%	16%
10月4日	14%	25%	24%
10月11日	20%	41%	32%
10月18日	28%	60%	43%
10月25日	38%	72%	56%
11月1日	49%	82%	69%

冬小麦			18州	冬小麦			18州
作付け	前年度	2020年度	過去5年平均	Emerged	前年度	2020年度	過去5年平均
9月6日	1%	5%	3%	9月20日	2%	3%	2%
9月13日	6%	10%	8%	9月27日	8%	10%	8%
9月20日	18%	20%	19%	10月4日	22%	24%	21%
9月27日	34%	35%	33%	10月11日	37%	41%	35%
10月4日	48%	52%	47%	10月18日	50%	51%	48%
10月11日	61%	68%	61%	10月25日	60%	62%	60%
10月18日	74%	77%	72%	11月1日	69%	71%	70%
10月25日	83%	85%	80%				
11月3日	88%	89%	86%				

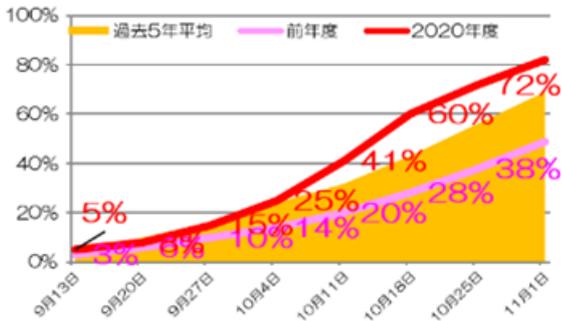
大豆			18州
収穫	前年度	2020年度	過去5年平均
9月27日	6%	20%	15%
10月4日	12%	38%	28%
10月11日	23%	61%	42%
10月18日	40%	75%	58%
10月25日	57%	83%	73%
11月1日	71%	87%	83%

冬小麦						
作柄	Very Poor	Poor	Fair	Good	Excellent	優と良
10月25日	6%	13%	40%	35%	6%	41%
11月1日	6%	13%	38%	37%	6%	43%
前年度	4%	9%	30%	45%	12%	57%

11月1日の米国産トウモロコシの収穫は82%完了(前年は49%、過去5年平均は69%)大豆の収穫は87%完了(前年は71%、過去5年平均は83%)冬小麦の作付けが89%(前年は88%、過去5年平均は86%)冬小麦の開花は71%(前年は69%、過去5年平均は70%)

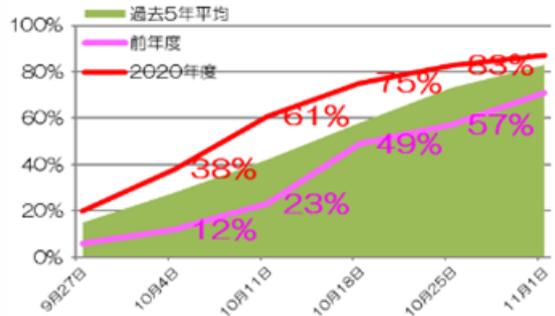
11月1日までのトウモロコシ

20/21年度の Harvested 進捗状況



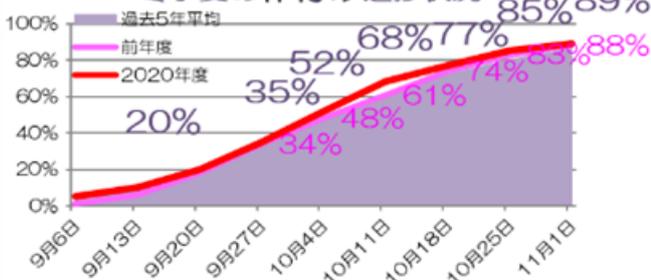
11月1日までの

20/21年度産大豆の Harvested 進捗状況

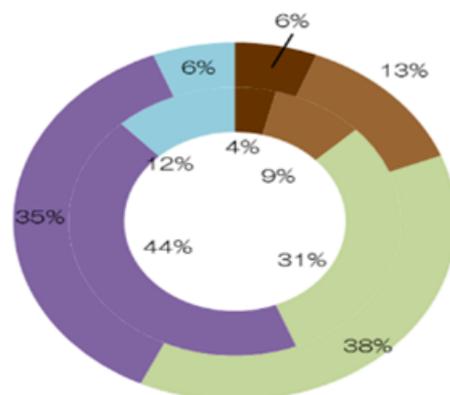


11月1日まで20/21年度米国産

冬小麦の作付け進捗状況



2020年11月1日冬小麦の作柄 (内側前年度：外側今年度)





USDA Gain Report 日本のトウモロコシ需給 by USDA Gain Report 20/09/18

飼料用需要

安定した家畜と家禽生産が若干増加して、配合飼料の生産は、わずかに増加すると予測されている。トウモロコシの消費量は、20/21年度で1600万トンと予測され、モロコシ消費量は、安価なトウモロコシとコメが日本全体の配合飼料に代わるにつれて、引き続き減少傾向が続くと予測されている。19/20年度の大麥の輸入は、肉牛生産の需要を満たすためにわずかに増加すると推定される。食用サービス需要の低迷と国内小麦生産の好調により、20/21年度の小麥の輸入は545万トンに下方修正となった。20/21年度のコメの生産量はやや増加すると予想されるが、消費量の減少により在庫を引き上げ、価格を下げると予測されている。新型コロナウイルスのパンデミックは、日本の穀物および飼料市場全体に限定的な影響を及ぼしている。

千トン・千ヘクタール	2020年9月16日		
	18/19年度	19/20年度	20/21年度
収穫面積	1	1	1
期初在庫	1,393	1,446	1,399
生産	3	3	3
輸入（穀物年度）	16,050	16,000	16,000
輸入（暦年）	16,050	16,000	16,000
供給合計	17,446	17,449	17,402
飼料用その他	12,300	12,400	12,400
食料用需要	3,700	3,650	3,650
国内需要合計	16,000	16,050	16,050
期末在庫	1,446	1,399	1,352
期末在庫率	9.0%	8.7%	8.4%
生産+輸入（①）	17,446	17,449	17,402
国内消費+輸出（②）	16,000	16,050	16,050
需給バランス（①-②）	▲1,446	▲1,399	▲1,352

20/21年度の日本のトウモロコシ生産量は480万ト

20/21年度のトウモロコシ生産量は前年度から+3,100トンと若干増となり、収穫面積は、前年度から+470ヘクタールをわずかに増加する見込み。北海道は収穫面積の約8割を占める。19/20年度は94,700ヘクタールの耕地で480万トンのトウモロコシが生産された。

20/21年度の日本のトウモロコシ消費量は1,240万

19/20年度の飼料用トウモロコシの消費量はわずかに増加して1,240万トン。飼料需要が若干増加したことによる。新型コロナウイルスにより和牛価格が下落し、牛の屠殺数が減少したが、鶏や豚の需要が好調なため、飼料需要は20/21年度も横ばいの1240万トンと予想されている

20/21年度の日本のコーンスターチ用トウモロコシ消費量は365万トンと横ば

19/20年度の食品・種子・産業用トウモロコシの消費量は、コーンスターチの需要の弱さを反映して365万トンに減少する見込み。20/21年度の食品・種子・産業用トウモロコシ消費量は、365万トンと横ばいの見込み。日本では、高果糖のコーンシロップ（HFCS）はコーンスターチから生産されているが、製造はジャガイモとサツマイモのデンプンも使用している。HFCSの消費量は、堅調な清涼飲料水生産によって17/18年度でピークに達したが、砂糖を伴う飲料に対する嗜好が敬遠される傾向があり、需要が減少している。2020年初頭には、新型コロナウイルス対策により、小売およびフードサービス全体の消費が減少し清涼飲料水とビールの消費量はさらに減少している。夏を通じてリバウンドしたにもかかわらず、消費は2019年の水準に達するとは考えられていない。

20/21年度の日本のコーンスターチ用トウモロコシ消費量は365万トンと横ば

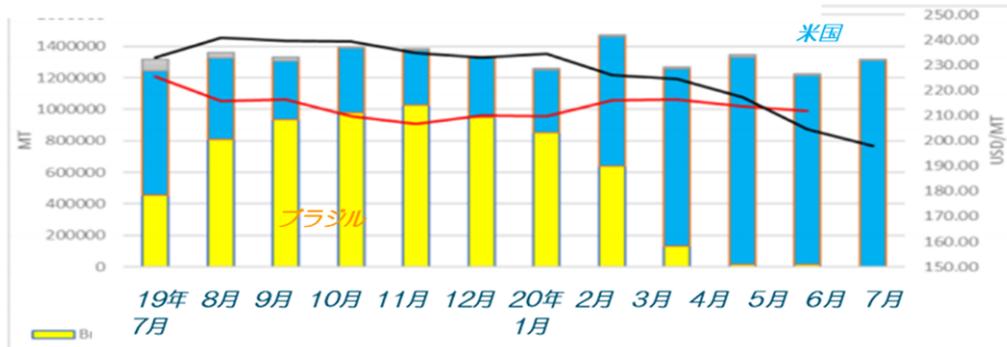
19/20年度の食品・種子・産業用トウモロコシの消費量は、コーンスターチの需要の弱さを反映して365万トンに減少する見込み。20/21年度の食品・種子・産業用トウモロコシ消費量は、365万トンと横ばいの見込み。日本では、高果糖のコーンシロップ（HFCS）はコーンスターチから生産されているが、製造はジャガイモとサツマイモのデンプンも使用している。HFCSの消費量は、堅調な清涼飲料水生産によって17/18年度でピークに達したが、砂糖を伴う飲料に対する嗜好が敬遠される傾向があり、需要が減少している。2020年初頭には、新型コロナウイルス対策により、小売およびフードサービス全体の消費が減少し清涼飲料水とビールの消費量はさらに減少している。夏を通じてリバウンドしたにもかかわらず、消費は2019年の水準に達するとは考えられていない。



日本のトウモロコシ輸入は1600万トン

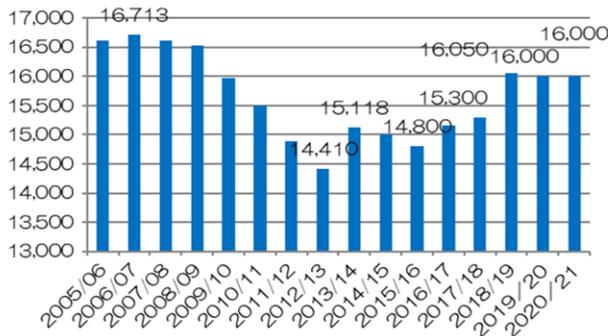
19/20年度のトウモロコシの輸入は、1600万トンで前年の1605万トンとほぼ変わらず。飼料用需要が増加するが食品・種子・産業用需要が減少することで相殺される。さらに20/21年度も1,600万トンと変わらないと予測している。輸入元は主に米国とブラジルで、秋は米国、春はブラジルから輸入される。19/20年度はブラジル産トウモロコシの価格競争力が強くなり、ブラジル産の市場シェアが高くなっている(図1)。この傾向は20/21年度も続くと思われる。

(図1) 日本のトウモロコシ輸入量とCIF輸入価格

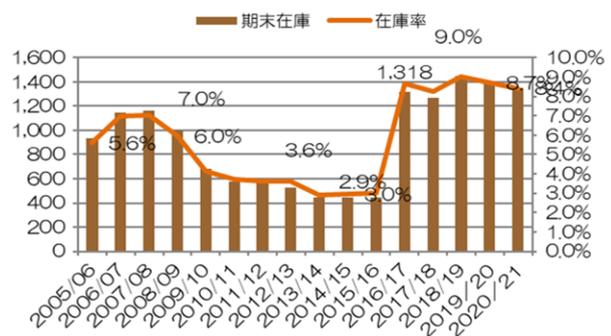


Source: Trade Data Monitor

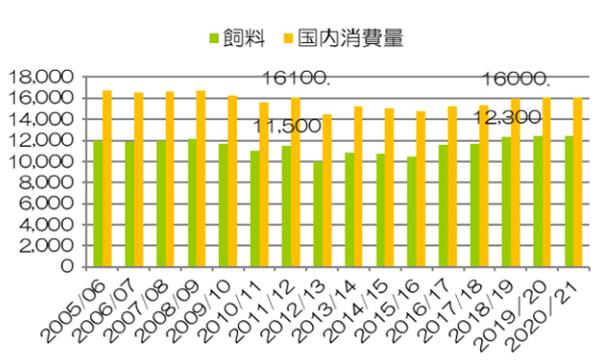
日本のトウモロコシ輸入量



日本のトウモロコシ飼料用需要と総消費量



日本のトウモロコシ飼料用需要と総消費量





中国の大豆需給 by USDA Gain Report 20/09/18

中国の大豆需給

2020/10/21

千トン/千ヘクタール	12/13年	13/14年	14/15年	15/16年	16/17年	17/18年	18/19年	19/20年	20/21年	前年比
作付面積	7,400	6,850	6,800	6,506	7,150	8,250	8,400	9,000	9,460	+460
収穫面積	7,400	6,850	6,800	6,506	7,150	8,250	8,400	9,000	9,460	+460
期初在庫	14,258	12,378	13,877	17,009	16,910	20,663	23,064	19,955	23,535	+3,580
生産	13,000	12,200	12,150	11,785	12,900	15,200	15,967	17,000	18,000	+1,000
輸入	60,000	70,364	78,350	83,230	93,495	94,095	82,540	95,000	95,000	+0
供給合計	87,258	94,942	104,377	112,024	123,305	129,958	121,571	131,955	137,535	+5,580
輸出	266	215	143	114	114	134	116	120	120	+0
圧砕	63,500	68,850	74,500	81,000	89,000	90,000	84,500	89,500	93,000	+3,500
国内食料用需要	9,250	9,650	11,000	11,100	11,500	12,100	12,900	13,500	13,600	+100
飼料その他	1,900	14,800	2,500	2,900	3,500	3,900	4,100	4,300	4,500	+200
国内需要合計	74,650	80,300	88,000	95,000	104,000	106,000	101,500	107,300	111,100	+3,800
期末在庫	12,348	14,427	16,234	16,910	19,191	23,824	19,955	24,535	26,315	+1,780
在庫率	14.1%	15.2%	15.6%	15.1%	15.6%	18.3%	16.4%	18.6%	19.1%	+0.5%
消費合計	87,858	94,942	104,377	112,024	123,305	129,958	121,571	131,955	137,535	+5,580

中国の大豆輸入は量19/20年度も、20/21年度も9,500万トン

20/21年度の中国の大豆輸入量は9,500万トンと予測している。養豚や養鶏用大豆ミールの飼料用需要が増えているため前回6月の予測に比べて+400万トン上方修正している。19/20年度も同じく9,500万トンの輸入と予測している。ブラジルからの輸入が3ヶ月連続の記録となっている。最初の10ヵ月で7900万トンの大豆が輸入された。20/21年度の中国国内の大豆生産量は、は前回のレポートと同様の+1800万トンと予測する。

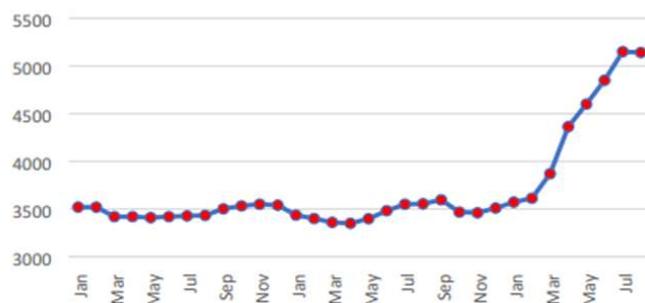
大豆生産量は1800万トン

20/21年度（10月～9月）の大豆生産量は、6月のレポートと変わらず、前年比+100万トン増の1,800万トンと予測。全体的に見て、気候は良好で8月中旬まで正常に生育している。養豚業がアフリカ豚熱騒動から回復し、養鶏需要の増加により、飼料生産は2020年の残りの期間と、2021年に増加すると予測されている。飼料生産の増加により大豆ミール需要が増加し、20/21年の大豆圧砕量は、6月のレポートから上方修正となった。20/21年の資料用大豆ミール需要は、前年比+270万トン増の9300万トン、大豆圧砕量は前年比+350万トン増の7,140万トンと予想されている。中国の植物油の需要は、新型コロナウイルスの流行中に広範囲にわたるレストランやカフェテリアの閉鎖のために2020年初めは落ち込んだ。一部のケータリング施設は8月中旬の時点でまだ完全に稼働しておらず、北京、遼寧省、新疆における6月中旬以降の新たな流行は、政府がこれらの地域での通常の事業運営に戻ることをさらに遅らせた。9月時点でこれ以上広範囲にわたる新型コロナウイルスの流行がないと仮定すると、中国の植物油の需要は、消費者信頼感が回復するにつれて20/21年度は回復すると予想される。

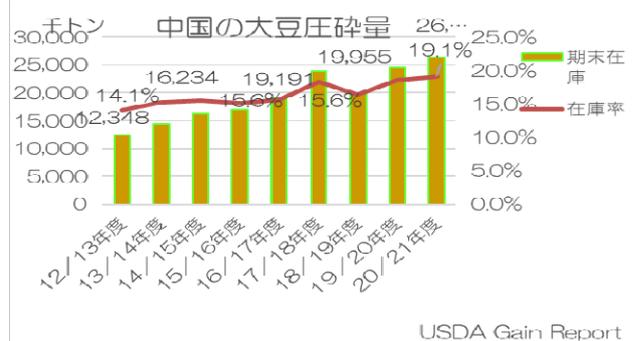
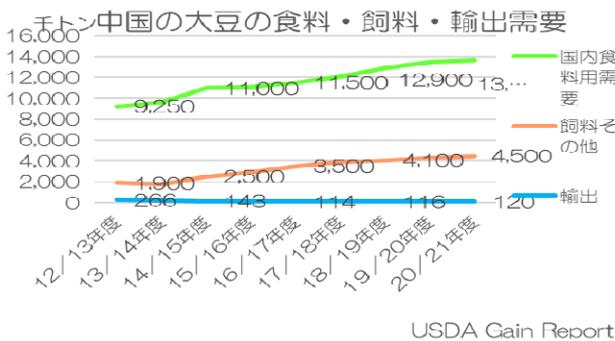
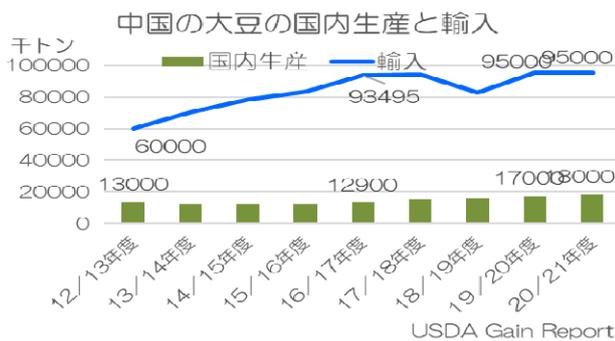
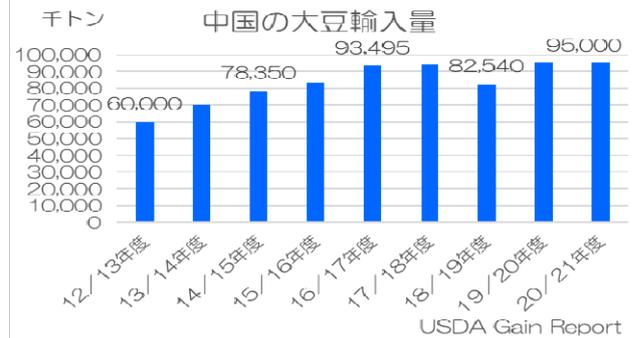
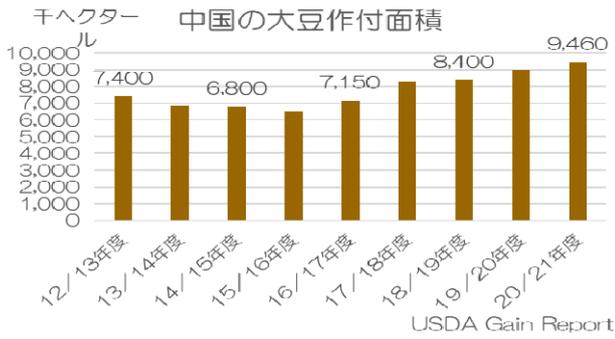
大豆価格は2月から上昇し7月にピーク

2020年の最初の数ヶ月間に政府の補助金が継続し、大豆価格が比較的高いことを踏まえ、作付面積が前年比+46万ヘクタール拡大し946万ヘクタールとなった。黒竜江省の大豆価格は2月から急速に上昇した。主に食品使用（国産、遺伝子組み換え無し）大豆の供給が比較的タイトだったため、大豆価格は7月にピークを迎えた。

2020年黒竜江省の大豆価格上昇
(2020年2月～8月 : 人民元/トン)



Source: China JCI





今後の予想

日本のトウモロコシ需要は世界の需要量11億6200万トンに対して、1600万トンと、約1%を占めるに過ぎない。それでも米国産トウモロコシにとっては、メキシコに次いで第二位の輸出先であり、安定的に輸入している国であるが、近年日本は中国同様にブラジル産を購入する選択肢を持ち始めた。ブラジルからの航海日数は長く、輸送コストは米国に比べてはるかに高い。また、米国には穀物倉庫があり、積み出し港には日本のガントリークレーンが備わっている。しかし、ブラジルレアル安などもあり、また米国の輸出時期とブラジルの輸出時期が異なることから補完関係にある。ただ、日本の飼料用需要は頭打ちであり、何よりも人口減少の影響により、今後トウモロコシ需要が急増することは見込めない。中国のように、人口が増え、かつまだ肉食に発展性のある国とは比べ難いと思われる。いずれにせよ日本のトウモロコシ価格はもっぱらシカゴの価格に大きく影響を受けざるを得ないだろう。シカゴトウモロコシは、20/21年度の単収が下方修正され、南米の干ばつなども織り込んで上昇していたが、その上げ相場も一段落してしまったようだ。需要が急増するとも思えず、また北米では収穫がほぼ完了しつつある。南米の一期作目が干ばつの影響で減少する可能性がある以外はそれ程強気の要因は見当たらない。

ここ数年の中国の大豆需給は、米中貿易摩擦やトランプ大統領の選挙区の問題で非常に面白い商品相場であった。トランプ大統領が中国製品に追加関税を掛けた時に、中国は対抗措置として、大豆の輸入関税を+25%上乘せした。これは大豆を植物性たんぱく源として養豚業等の餌として必要としていた中国にとっては、苦渋の決断であった。早速ブラジルやアルゼンチン産の大豆の品質検定を早めて合格とし、米国からの輸入を南米からの調達に転換した。一方南米では押し寄せる中国からの引き合いに大增産した。しかし、南米の農民はいつこうした中国からの買いが一時的なものになるか戦々恐々であり、農民にとっては難しい決断であった。しかし、ブラジルレアルやアルゼンチンペソの通過安により、南米諸国の価格は割安となり、南米農家の手取りは多くなった。

一方、中国政府は、輸入に頼らない体制作りのために昨年から東北地方をはじめとして全国に大豆の大增産命令を出し、トウモロコシや他の作物より手厚い補助金を支給している。一朝一夕には増産は出来ておらず、また中国の国産大豆の比率は増えていない。一時はアフリカ豚熱で飼料需要が減少したが、養豚業は危機を乗り越えて回復しており、また豚肉が生産できなかった時に流行った鶏肉の需要が新たに加わっている。こうした旺盛な飼料用需要のために、中国は、大豆をまだ輸入に頼らざるを得ない状況である。以前は中国の買いは米国産大豆の輸出の約6割を占めていたが、一時成りを潜めた米国産大豆の買い付けは、第一次貿易協議合意の結果として、再び始まっている。中国としても、トランプ大統領の選挙地盤である中西部の農民票を取らせないための措置であったが、大統領選挙も終わるため、政治的な足かせは取れることになる。

こうした大豆の需給を見ていると世界の政治や貿易のダイナミクスを感じられるが、日本の大豆先物取引は全く成約できていないのが大変残念である。

掲載される情報は株式会社コモディティー インテリジェンス（以下「COMMi」という）が信頼できると判断した情報源をもとにCOMMiが作成・表示したものです。その内容及び情報の正確性、完全性、適時性について、COMMiは保証を行なっており、また、いかなる責任を持つものでもありません。

本資料に記載された内容は、資料作成時点において作成されたものであり、予告なく変更する場合があります。

本文およびデータ等の著作権を含む知的財産権はCOMMiに帰属し、事前にCOMMiへの書面による承諾を得ることなく本資料およびその複製物を修正・加工することは堅く禁じられています。また、本資料およびその複製物を送信、複製および配布・譲渡することは堅く禁じられています。

COMMiが提供する投資情報は、あくまで情報提供を目的としたものであり、投資その他の行動を勧誘するものではありません。

本資料に掲載される株式、債券、為替および商品等金融商品は、企業の活動内容、経済政策や世界情などの影響により、その価値を増大または減少することもあり、価値を失う場合があります。

本資料は、投資された資金がその価値を維持または増大を補償するものではなく、本資料に基づいて投資を行った結果、お客様に何らかの障害が発生した場合でも、COMMiは、理由のいかんを問わず、責任を負いません。

COMMiおよび関連会社とその取締役、役員、従業員は、本資料に掲載されている金融商品について保有している場合があります。

発行元：



COMMODITY
INTELLIGENCE

株式会社コモディティー インテリジェンス 4東京都中央区日本橋蛸殻町1丁目11-3-310
☎社電話：03-3667-6130 会社ファックス 03-3667-3692
✉メールアドレス：kondo@commi.cc